

京都市長選、共産・れいわ推薦候補が健闘 「市民がつくる政治」へ道筋

3氏による激戦となった京都市長選は2月2日に投票票され、現職の門川大作氏(69歳)＝公明党・自民党・立憲民主党・国民民主党・社民党の各京都府連推薦＝が、共産党とれいわ新選組が推薦した弁護士の福山和人氏(58歳)と地域政党出身の前市議・村山祥栄氏(41歳)を破って4選を果たした。福山陣営は市民が前面に立つ選挙団体を立ち上げ、政党と共闘して健闘したが、保守の堅い組織票に阻まれた。敗戦の弁で福山氏は「市民が政治をつくっていくという流れはできたのではないかと意義付けた。得票数は門川氏21万6400票、福山氏16万1618票、村山氏9万4859票。投票率は40・71%(前回35・68%)だった。

京都は伝統的に共産支持層が厚い。門川氏が初当選した2008年の同市長選挙(4人が立候補)では次点の共産推薦候補との差は951票。今回再挑戦した村山氏は当時も約2割の票を獲得した。今回も似た構図に門川陣営は危機感を強め、「市庁舎に赤旗が立つてはいけない」などと煽った。

門川陣営は1月26日付の『京都

新聞』朝刊に1ページ中の3分の2の大きさで広告を掲載。「大切な京都に共産党の市長は『NO』」と大きな見出しを掲げ「わたしたちの京都を共産党による独善的な市政に陥らせてはいけません」と批判。「ONTEAMで京都の未来を守りましょう」と著名人9人の名前と顔写真を掲載したが、そのうち日本画家や放送作家は掲載後ネット上で「特定の党を排他するようなネガティブキャンペーンには反対」「事前の説明も、了承もなく、掲載された」と反発。ネットでは「赤狩り広告」「ヘイト」といった批判があふれた。



れいわ新選組の山本太郎代表(左)と共に街頭演説に臨んだ福山和人氏。(撮影/土岐直彦)

一方で福山陣営は同じ大きさ、同様の体裁の「カウンター広告」を1月30日付『京都新聞』朝刊に出した。門川陣営の文言に對抗、「大切な京都だから全ての市民の声を聴く市長に『YES』」との見出し。土建型政策に対抗して、「返さなくてもいい奨学金」「小学校のような中学校給食」といった「市民のくらし丸ごと応援」の政策を並べた。パロディ風の大人の対応で、共感を持たれた。

国政では共闘しながら門川支持に回った野党3党。共産対非共産」という捻れの構図は京都では毎度のことだ。地元選出の福山哲郎・立憲幹事長は「京都で共産と組んだら政治生命がなくなる」と福山陣営幹部に釈明したという。腐朽する安倍政権に対峙する野党としてはたしてこのままでいいのかは今まさに問われている。

山本太郎氏は4回京都入り

福山和人氏は18年の京都府知事選にも共産推薦で立候補し、惜敗。その際、市民らでつくる選挙組織「つなぐ京都」が発足し、今回市長選の選挙団体「つなぐ京都2020」に発展させた。政党との間を市民が結び、共同代表11人のうち政党からは2人だけ。市民との

タウンミーティング、寄せられた意見をすぐ採り入れる政策パンフレット作成など、市民目線で選挙戦を進めた。「暮らし第一」主体の政策チラシは4回更新した。

選挙戦最終日の2月1日夕、京都市中京区のJR二条駅前には、れいわ新選組の山本太郎代表が来援するとあつて寒風の中、多数が集まった。福山氏は街宣車の前に立つと、子育て・若者・高齢者支援、地域経済の活性化の「すぐやる四つのパッケージ」を訴え、「市予算のたった1%の額でできること。カネがないのじゃなくて、(現職に)やる気がないのじゃないですか」と声を張り上げた。

拍手に包まれ山本氏が登壇。大人の貧困、子どもの貧困、実質賃金の低下を取り上げ「それは自己責任ではない」と持論を展開。「あなたの生活を底上げする人は福山さん」と熱弁をふるった。告示前を含め4回の京都入り。れいわは応援ボランティア「チーム大阪」20〜30人を連日、福山氏の応援に派遣、今後の政治活動への実験的な試みをしたが及ばなかった。

2日夜。女性のすすり泣きが漏れる選挙事務所。白坂有子事務局長は「誰もが大切にされる社会を手を携えてつくっていきましょう」と締めくくった。

土岐直彦・ジャーナリスト